

## タイトな統制、ルーズな統制

何のことかという、道徳教育のことである。

本題に入るまでにちょっと寄り道。

タイトは **tight** で、ルーズは **loose** である。つまり、「かたい」と「ゆるい」である。

私にとって「タイトな統制、ルーズな統制」は以前から頭に残っている言葉である。

平成5、6年ごろだったか、職員団体の支部役員になったときのことである。当時、今と比べればまだまだ政治闘争があり、法的根拠等を理解したく、容易な教育法規の本を購入して読んでいた。

当時、校長採用（昇任）資格に教員免許が必要であり、今以上に厳しかった。

そういうことも含め、教育界は、教員免許という厳格な（かたい）条件が必要であること、そして、学習指導要領により学習内容は規定されているが、指導方法等は教員の工夫等の裁量があり、ゆるい部分があるとされた。つまり、「タイトな統制、ルーズな統制」なのである。

したがって、当時、理科や教育工学のサークルに所属して、いろんな指導を試みた時期であった。

（年をとったせいとか、その頃が一番充実し、勉強していたと思う。）

本題に入る。

最近、「特別な教科 道徳」のことについて、文章を読むことや話を聞くことが多い。教科化ということで、いろいろと準備をし、対応することがあり、ベテランや中堅にとっては頭の切り替えが必要かもしれない。先生が道徳を嫌いにならないか危惧している。

私の現役時代、道徳の授業はどちらかというが好きであった。というか嫌いでは無かった。

内容項目と関わりある新聞記事や映像等を教材にしたものだ。時は平成に入り、多様な考えを持つ先生、生徒、保護者がいる時代に入っていたので、「～せよ」という授業は（自然と）しなかったように思う。しかし、若さだけの勢いで、学年の生徒全員引きつけて、校舎周辺のゴミ拾いまでしたこともあった。先輩の先生方はよく許してくれたものだ。

また、保護者にせっかく買って頂いた読本は、学年の先生全員の約束で、35単位時間で、とにかくすべて読こととし、できるだけ使った。

カッコいいことばかり書いたが、中には、どうしても時間が無く、「協力しよう」という内容項目で、運動会の選手決めに道徳的に行ったことはある。

多くの先生方は道徳を大切にしてきたと思う。しかし、教育界全体では、道徳教育が十分に機能しないこととともに、いじめ等の社会的な問題が生じてきて、「とにかくしっかり道徳をしてください」ということで、教科化になった経緯がある。

一方で、教科化を創り上げた文部科学省や協力者たちは、道徳教育の反省点を踏まえ「画一的な授業にならなうように」「教師の押しつけにならないように」と多様で柔軟な授業を求めている。道徳教育の研究を行っている先生ほど、お手本となる指導案をつくり画一化しているともいっていた。しかし、画一的な方法を示さないと取り組んでくれない先生がいたことも見逃せない。

さて、おわかりと思うが、教科書を用い、すべての徳目を履修し、評価を行う必要があり、未履修を防がないといけない。まさにタイトである。しかし、根底には、児童生徒に考えさせ、授業で学習したことにより、自らの判断で道徳的な行動をおこせるようになって欲しい。そのためには、柔軟な、型にはまらない、多様な授業をして欲しい、という思いがあることは間違いない。まさにルーズである。

最後に、今回の改正には、「校長の方針のもと」道徳教育を行うこととなった。校長の「我が校の道徳教育は絶対にこうしなくてはならない」的なタイト過ぎることにならないリーダーシップが求められるのである。複雑すぎて、道徳教育が停滞方向に振り子が戻らないことを祈る。